令和二年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」
（知事賞）優秀賞　（中央審査）入選

「水と共に生きる道」

松山市立鴨川中学校　一年　木下　大悟

「もう駄目かもしれないな・・・。」

テレビに映し出された映像を見て、ポツリと父がつぶやいた。初めて見る父の悲しげな背中に、胸がしめつけられた。降りしきる雨音は、僕の心にグサグサと突き刺さってきた。普段とは全く違う大雨。全然止みそうにない。外を見ると、すぐ側の川がもう少しで氾濫しそうだった。僕は、怖くて一睡も眠ることが出来なかった。

次の日のニュースで、

「氾濫を起こしました！」

レポーターが叫んだ後ろに映る場所は、確かに見覚えのある場所だった。

二〇一八年七月、西日本豪雨により、父の会社の店が天井まで浸水し、全てを失った。昨日まで当たり前に過ごしていた日々は、もう二度と帰っては来ない。僕はこの時初めて水の怖さを知った。

片付けをする為、父は水が引いたお店に出かけて行った。夕方帰宅した父から、見せてもらった多くの写真に、僕は言葉を失った。浸水によって店の中の商品は散乱し、見る影も無くなっていた。泥と砂にまみれたフロアは、水の脅威を物語っていた。僕の知っているお店は、もうそこには無かった。水が全てを奪ってしまったのだ。柱に残された浸水がここまできたという水の線は、父の身長をはるかに越えていた。

今までの僕は、雨は恵みだと思っていたし、雨によって人々の生活は守られているとさえ思っていた。雨が人々を脅かすものになるなんて、少しも考えたことは無かった。「水は限りある資源」という言葉をよく耳にする。以前テレビで、人が生存するのに必要な水は、

二リットルあまりで、人として生活を送るのであれば、一日に最低二十から五十リットル必要であるという事を聞き、とても驚いた。蛇口をひねれば当たり前に水が飲めて、使えると思っていたからだ。

この出来事をきっかけに、僕は幼かった頃の事を思い出した。ある日、母と何気なく見ていたテレビに、目を奪われた。ペットボトルに入った泥水を、小さな女の子がゴクゴクと飲んでいたのだ。学校へ行くことも出来ず、飲み水を汲むために、朝早くから出掛ける。何十キロという重いタルを頭に乗せて、水を運ぶ。その時の僕は、「かわいそうだな。」という気持ちしかなかった。しかし、今考えてみると、キレイな水を飲めることが当たり前ではないと強く感じる。世界では、水を確保することが出来ず、年間四百八十万人、一日に換算すると五千人近くが亡くなっている。僕はこの事実を知った時、驚くとともに、とても悲しい気持ちになった。水は、人が生きていく為には絶対必要であり、大切である。しかし、それらは時として、水害を起こし、人の命を奪ってしまう場合もあるのだ。だからこそ、水と向き合って生きていかなくてはならない。

僕は改めて、水に対しての取り組み方を考えてみた。まず一つ目は、「水を大切に使う」こと。日常生活の中では、お風呂の残り湯は洗濯の時に再利用し、米の研ぎ汁は洗顔に使う。そうすることで、日々の節水に役立てることができるだろう。二つ目は、「水害に備えておく」こと。このことは、西日本豪雨で起きた父の出来事から学んだ。ハザードマップから最寄りの避難場所を確認したり、非常用品のストックをしておいたり、身近に出来る事はたくさんある。三つ目は、「世界に目を向ける」こと。世界には、日本のように簡単に水を手に入れることが難しい地域がある。そのような地域に井戸を掘って、水を手に入れようという取り組みが行われている。僕は、そのボランティアに参加したいと考えている。

人は、生きるために水を手にする。それは時として災害になる事もある。しかし、水とうまく共存していくことで、人々は幸せな生活を送ることが出来るのだ。僕はこれからも、水と共に生きていきたい。そう強く願う。